

研究ノート

西アジア先土器新石器時代研究の動向

増森 海笑 D.

本稿では近年活発な議論が行われている西アジアの先土器新石器時代の研究動向をまとめた。最近是新資料の発見や分析技術の改良など各分野の研究がめざましい発展を遂げており、これまでの常識が通用しなくなっている。研究の結果、農耕牧畜へひた走るような従来の単純な新石器時代像はもはや顧みられなくなり、かわってゆるやかなドメスティケーションの展開が明らかにされた。また大型の特殊遺構が相次いで発見されるな

ど、新石器時代の社会構造についても根本から見直す必要が出てきている。

2000年以降の研究をテーマや手法にそってまとめたうえで、「二項対立構造からの脱却」「ローカルヒストリーの重要視」「儀礼の強調」「化学的分析手法の利用」が多くの研究分野に共通するトピックであることを示した。これらを踏まえたうえで、今後の研究には蛸壺的に分散する研究領域を丁寧に横断するような試みが必要であると考えられる。

I. はじめに

西アジアの新石器時代はそれまでとは異なる居住形態や社会構造が誕生した時期、ないしは大きく変化した時期であると捉えられてきた。しかしながら、その変化は「農耕革命」のような単純な図式で描けるようなものでないことも近年の研究によって明らかにされている。このように大きな枠組みでの説明が棄却されつつある今、どのような切り口で西アジアの新石器時代は叙述されているのであろうか。新石器時代研究を取り巻く状況が大きく変化するなか、これらの新しい研究の動向を整理することによって、今後の研究の方向性を占うことができるだろう。

本稿は、西アジア考古学において最も研究が盛んな時期のひとつである先土器新石器時代(Pre-Pottery Neolithic)の最近の研究動向を紹介することを目的としている。そのため、これまでの多様な研究のなかでも、2000年以降のものを中心に引き上げ、今どのようなことが問題になっていて、いかなるアプローチが試みられているのかを整理した。

この時期の最も注目されるテーマは農耕と牧畜の起源である。このテーマをめぐって古くから盛んな議論がなされているが、今でもその熱は冷める気配がない。最近では2009年に世界の農耕と牧畜の起源を主題としたシンポジウムがメキシコで開催され、その要旨が2011年の“*Current Anthropology*”誌の増補版に特集として掲載された(例えば、Zeder 2011)。日本国内でも2009年に国立民族学博物館調査報告において『ドメスティケーション—その民族生物学的研究—』と題した特集が組まれた(例えば、大田 2009)。ほかにもここ数年で農耕と牧畜の

起源やその展開に関する書籍が相次いで刊行されており（例えば、Barker 2009; 西秋編 2008; ベルウッド 2008）、この分野に対する関心が世界中でますます高まっているように見受けられる。

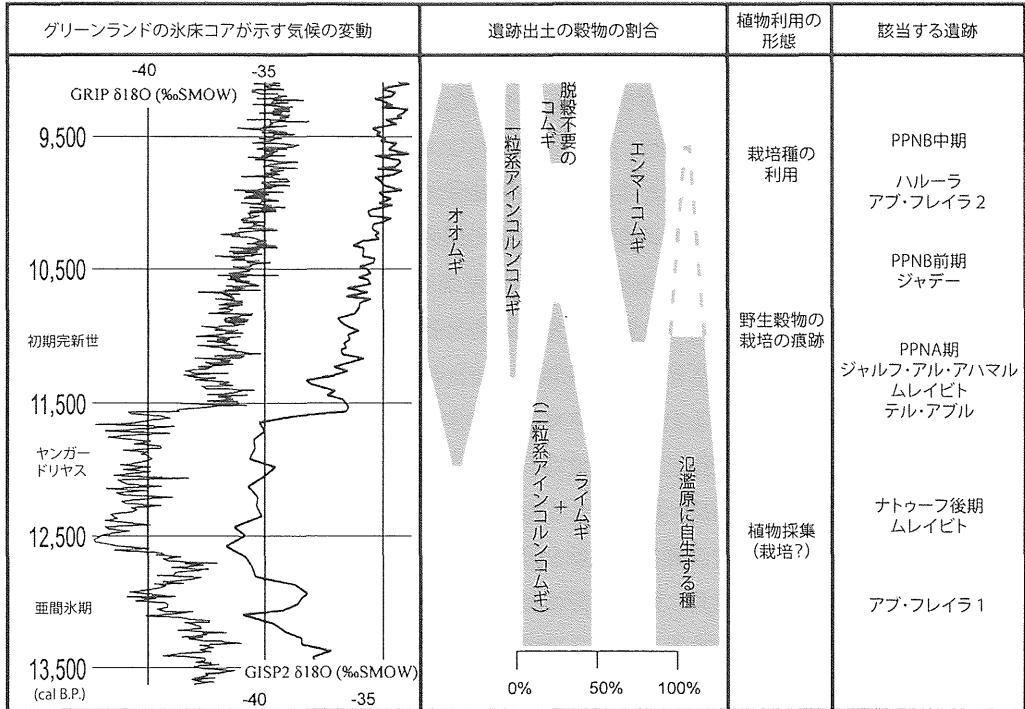
II. 人間と自然環境の関わり

1. 植物考古学的視点

農耕がいつ、どこで起源したのかという問いに一番の発言権をもつのは植物考古学者であろう。これまでの研究では、更新世末のヤングドリラス期という寒冷期の影響が重要視されており、それまでの後氷期に野生ムギ類への依存を強化していた高級狩猟採集民が、寒冷化による資源の減少に対応する形で栽培を始めたという考え方が一般的であった（Bar-Yosef and Meadow 1995）。この考えのもと、農耕は先土器新石器時代 A 期（PPNA 期）にレヴァント回廊内で開始されたという説が多くの研究者に支持されていた。

しかしこのような図式は、近年のウィルコックス（G. Willcox）らの研究によって再検討を迫られている。彼はまず野生のコムギやライムギの分布を調べ、それを更新世末のものと比較することによってヤングドリラス期における気候変動の影響を評価した（Willcox 2005）。その結果、気候変動の影響はこれらの植物にはほとんど見られないこと、ヤングドリラス期にはまだ農耕が確立されていないことを指摘し、ヤングドリラス期の影響を過大評価する見解に釘を刺した形となった。また彼の研究グループは PPNA 期から土器新石器時代にわたる約 4000 年の間に居住されたシリアの諸遺跡から出土した植物遺存体の分析を精力的に行っている（Tanno and Willcox 2006; Willcox et al. 2009）。ここではムギの穂軸の離層という組織に着目し、栽培種を判別する指標とされる種子の脱落性を定量的に評価している。この手法で分析することで、栽培種と脱穀された野生種の誤認を防ぐことができ、同定精度が飛躍的に向上したという。また遺跡を横断して通時的に観察・比較を行うことで、脱落性を喪失した栽培ムギが遺跡内で主体となるまでに 3000 年以上の時間を要したことが明らかにされた。これまで「革命的」な変化であると考えられてきたものが、実際は漸進的なものであり、形態的には野生種の特徴をもつ植物の利用が長期間にわたって行われていたと彼らは主張している（第 1 図）。野生種の形態をもつ植物利用の実態を明らかにして栽培化の初現を捉えるために、ウィルコックスらは大きな穀粒や畑に生える雑草の存在などの 5 つの指標を設けて、ジャルフ・アル・アフマル（Jerf al-Ahmar）遺跡など PPNA 期の 4 遺跡の植物遺存体を分析した（Willcox et al. 2007）。とくにジャルフ・アル・アフマル遺跡では他よりも多い 16 種もの雑草が出土していることが示されたことで、ここでの植物栽培の痕跡が明らかとなった。さらに穀物以外のマメやイチジクについても研究成果が蓄積されており（Kislev et al. 2006; Weiss et al. 2006）、PPNA 期におけるこれらの植物の大量の出土は、栽培化ではなく野生種の管理として評価するのが妥当であると考えられている。

栽培へ至るまでに長い野生種利用を想定する研究者が多い中、アインコルンコムギの栽培化をもっと短い期間で考えるべきであるという意見がウィルコックスらの研究を批判的に検討し



第1図 穀物の栽培化へ至るゆるやかな道程 (Willcox et al. 2007 を元に作成)

たハルドーセン (S. Haldorsen) らによって提示されている。彼らはウィルコックスらの分析において、PPNA 期のサンプルが少なすぎることを指摘し、少なくとも南東アナトリアの一粒系のアインコルコムギについてはヤンガードリヤス期が終わって間もない時期 (10,400 cal B.P.) に急速に栽培化されたと主張している (Haldorsen et al. 2011)。さらにコムギの DNA 分析によってその起源地が南東アナトリアのカラジャダー (Karacadağ) 地域に求められていることも、この説を支持する材料となろう (Heun et al. 2008)。

また新石器時代初頭における野生植物の利用形態を明らかにし、野生種の管理や収穫を評価しようとする考古学的研究もある。この分析は PPNA 期のダラー (Dhara) 遺跡で出土した鎌刃を対象に行われた (Goodale et al. 2010)。ここではムギ類の収穫実験を行った後に、その鎌刃と遺跡から出土した鎌刃の両者の刃部厚が比較された。その結果、収穫実験によって石器刃部が摩耗して厚くなることが確認されたが、出土した鎌刃はさらに分厚い刃部を有しており、当時の人びとが集約的にムギ類の収穫を行った結果として鎌刃が極端に摩耗したと解釈された。このような手法は直接的な証拠を扱っていないので、遺跡出土鎌刃の摩耗が本当にムギ類の収穫によるものなのかを証明することは難しいが、植物遺存体の観察からだけでは捉えきれない植物利用の実態に迫るためのひとつの試みとしては評価できる。

2. 動物考古学的視点

動物考古学の分野では、野生動物の家畜化の起源が非常に重要なテーマとされている。後の社会に与えた影響の大きさからヤギとヒツジ、そしてウシとブタの家畜化の起源がとくに注目されてきた。

家畜化の起源をめぐる研究のなかでは動物の個体サイズの小型化をいかに読み取るかという点が、重要であると考えられてきたものの、近年の研究の結果、家畜化を示すとされる指標は必ずしも単純にあらわれるものでないことが分かってきた (Zeder 2005)。動物の個体サイズを決定する因子は主に性別であり、乾燥化や気温の上昇によっても個体サイズの小型化が起こることが分かっている。またズィダー (M. A. Zeder) によれば、遺跡にのこされた大型の個体は、単に狩猟民が肉を多く得るために大きい雄の個体を選ぶという戦略を反映しているだけであり、それだけで野生種の証拠とはみなせないという。反対に、家畜の証拠とされてきた小型の個体は、牧畜民が雌の個体を多く飼育したことに起因しているに過ぎないと述べている (Zeder 2011)。このような考古資料の複雑な形成過程を考慮すると、遺跡から出土する動物群のあり方は多様性に富んでおり、家畜と野生動物を明瞭に区分することは困難を伴う。

人間と動物との関係の変化を考えるなかで、遊牧民についても様々な議論が展開されてきたが (例えば、藤井 2009)、その遊牧化の背景に乳利用の開始を想定する研究者もいる (Köhler-Rollefson 1992; Vigne and Helmer 2007)。乳利用の起源は銅石器時代までしか遡らないという考えがこれまでなかば定説化していたが、近年の資料の蓄積や同定技術の開発によって先土器新石器時代まで遡る可能性が指摘されるようになってきた。この主張の根拠は大きく二つある。ひとつは、現在の遊牧民は乳や毛などの二次的生産物を効率的に利用して家畜頭数を極力維持する戦略を採用しており、食肉利用を目的とした遊牧化は想定しづらいことである。もうひとつの根拠は遺跡出土の動物骨の年齢構成である。ヴィーニュ (J. D. Vigne) らはこれまで明らかにされてこなかった乳利用の実態を解明するにあたって、動物の歯を観察して動物群の年齢構成を明らかにすることから着手した (Vigne and Helmer 2007)。彼らは年齢階梯を7つに区分し、動物群全体の中でそれぞれの階梯がどれほどの割合を占めればどのような利用形態が想定できるのかをモデル化した。この研究によれば、PPNB 後期のいくつかの遺跡から得られた動物群の組成が乳利用を想定したモデルとうまく合致しているとして、家畜化の初期段階から乳利用があったと解釈された。そしてPPNB 中期以前では多くの野生種が狩猟されていることに触れ、食肉目的で動物をわざわざ家畜化することは不自然であると説明している。しかし動物骨の性別判定が充分に行われていないことや、異なる遺跡間を単純に比較している危険性を考慮すると、その結論をそのまま受け入れることには慎重にならざるを得ない。また近年では化学分析も進んでおり、北西アナトリアでは土器の胎土に残された脂質を炭素同位体分析にかけることによって反芻動物 (ウシ) の乳利用が前7000-5000年頃まで遡ることが示された (Evershed et al. 2008)。土器の出現からほどなくして確認された乳利用の痕跡は、初期の土器の機能に関する議論にも一石を投じる可能性もあろう。

構築した段階を家畜と考えるのであれば、家畜の判定は慎重に行うべきである。キプロスの事例は島という特異な空間から資料が見つかったことによって問題とされた。しかしこれが大陸部で見つかったとしたら、果たして人間による動物群の管理の影響を評価できるのであろうか。キプロスにおける家畜化の問題は、動物と人間との関係の多様性を端的に示しており、複雑なプレ・ドメスティケーションの実態をどのように捉えるべきなのかという方法論的課題を浮き彫りにしている。

このように、動物考古学から家畜の起源を求めるといふ試みは多く行われてきたものの、依然として困難な問題を抱えている。形態の違いがみられたとしても気候が影響している可能性があり、年齢・性別構成から論じてもそれはそのまま家畜化の展開を示してはいない可能性がある。反対に形態が野生種でも人間の管理下におかれていた動物かもしれない。したがって家畜化に迫るためには、結局は多様な指標を用いて総合的に判断すると言えないのが現状である。幸いにして動物考古学の分野でも化学的手法を用いた研究が多くなされるようになってきている。例えば遺跡から出土した動物の食性を明らかにするべく炭素・窒素同位体分析を中央アナトリアで行った例がある。ここではPPNB期のアシュクル・ホユック (Aşkılı Höyük) 遺跡と土器新石器時代のチャタル・ホユック (Çatalhöyük) 遺跡が比較され、それぞれの動物群管理戦略が有蹄類の食性分析から明らかにされた (Pearson et al. 2007)。同位体分析を行うことで、①遺跡周辺にはC4植物(ここではイネ科かアカザ科)が自生していること、②アシュクル・ホユック遺跡出土のヤギ・ヒツジの数値は個体差が小さくC4植物の影響が見られないこと、③一方でチャタル・ホユック遺跡では個体間の食性差が大きくC4植物も食べていたことが示された。この結果はアシュクル・ホユック遺跡における家畜飼養戦略が比較的初期段階のものであり、ある限られた牧草地へ群れ全体で移動していたことを示唆するという。さらにチャタル・ホユック遺跡ではより発展した形で家畜経営が行われており、動物群を小分けにして管理していたとともに、非常に長い距離にわたって放牧した結果として食性に多様性が生まれたと結論された。このような議論は遺跡における出土状況などを考慮せずに単純な分析値だけを取り扱っているものであるため、ここで提示されたシナリオをそのまま受け入れることはできない。しかしながら、化学分析と考古学的分析をうまくリンクさせることができれば、より説得力のある研究が可能となるであろう。

Ⅲ. 儀礼や象徴に関する研究

1. 埋葬行為のあり方

先土器新石器時代の特徴的な埋葬には、頭骨の特別な取り扱いが挙げられる。頭骨埋葬は遺体から頭骨を取り外して身体部とは別に埋葬する方法であり、ナトゥーフ後期でわずかに知られるほかは、主として先土器新石器時代にみられる埋葬形態である。いくつかの遺跡では外した頭骨をプラスターで覆ったいわゆるプラスター頭骨が出土するほか、南レヴァントではプラスター塑像も確認されている(例えば Stordeur 2003; Koutsadelis 2007)。

このような埋葬の意味についても様々な議論が行われてきた。近年では世帯内における死者の頭部のディスプレイを通して、生者と死者のつながりを象徴的に明示することに意味があったと考える研究者が多く（例えば Watkins 2004）、その背景には資源や土地の所有権の象徴としての機能が想定されている（Bienert 1991; 常木 2010）。

しかしながら、カイト（I. Kuijt）によればこれらの頭骨埋葬やそのキャッシュは、それぞれの出自にかかわらず被葬者が同じように扱われたことが明示されているものであり、経済的・社会的基盤が不安定なコミュニティにおける政治的な意図が込められているのだという（Kuijt 2000b）。また彼は PPNA 期における埋葬の諸属性を詳細に比較することによって、ナトゥーフ後期と PPNA 期の間には大きな経済的・人口学的変化は認められるものの、儀礼などに現れる社会的・文化的基盤は時代を超えて共有されていたと主張している（Kuijt 1996）。彼はナトゥーフ後期と PPNA 期の埋葬上の特徴（副葬品の欠落、単体埋葬、墓の簡素化、頭骨外し）には、特定の個人や血縁集団への権力や威光の集中を抑制する効果があり、当時の大きな経済的社会的変化の中において社会経済的格差を埋めてコミュニティをまとめあげることに役立っていたと結論している。

またゴーリング・モリス（N. A. Goring-Morris）らはクファル・ハホレシュ（Kfar HaHoresh）遺跡をケーススタディとして、埋葬人骨の年齢構成復元から遺跡の特殊性を描出しているほか（Eshed et al. 2008）、プラスターの象徴的機能についても考察している（Goring-Morris 2000）。後者では、この遺跡でプラスターが頭骨の装飾だけでなく遺構の床面などにも利用されていることから、プラスターが生者と死者の媒介として利用されていたと解釈している。これはプラスター利用に象徴的な意味を求める興味深い論考であるが、プラスター貼りの住居は装飾頭骨が出土しない遺跡でも確認されており、この解釈をそのまま他の遺跡にも適用することは難しいだろう。また、ゴレン（Y. Goren）らは各遺跡で見つかったプラスター頭骨を化学的に分析し、これらの製作技術には遺跡間で共通の基盤がありながらも、仕上げは遺跡固有の技術に基づいていることを明らかにした（Goren et al. 2001）。すなわち概念の共有が象徴的な部分にとどまっており、具体的な製作技術の部分にまで及んでいないことが示されたのである。さらにボノゴフスキー（M. Bonogofsky）はプラスター頭骨を CT 画像も利用して詳細に分析した。彼によればプラスター頭骨は以前考えられていたように成人男性に限定されるものではなく、女性や子供のものも含まれるという（Bonogofsky 2003, 2004）。性別や年齢による明確な差が認められないことや、様々なコンテクストから出土することを指摘したうえで、その背景には祖先崇拜ではなく、より多様な機能を認めるべきであると述べている（Bonogofsky 2004: 118）。これらの研究に共通するのは、これまで単純な図式で語られてきたものを詳細に分析することによって、より複雑な様相を描き出していることである。実態に即した理解を提示することは歓迎するべきだが、遺跡間や資料間の相違の背景を解釈することは現時点では避けられており、今後の研究のさらなる展開が求められる。

また、ユーフラテス河中流域で PPNB 中期から後期に年代づけられるテル・ハルラ（Tell

Halula) 遺跡では、埋葬人骨を対象とした興味深い論考が近年立て続けに発表されている。この遺跡では 16 軒の住居の床下から計 114 体もの人骨が座位屈葬の形で埋葬されていた。人骨はいずれも統一されたプランをもつ住居内の一定の箇所掘られた墓坑の中に個別に埋められていることは、この集落で長期間働いていた規制の強さを物語っている (Guerrero et al. 2009)。住居を単位として副葬品を比較した分析によれば、PPNB 中期では住居間での差異は明確でないものの、後期になるとその差異が顕在化するという (Kuijt et al. 2011)。この研究では副葬品の多寡に世帯の自立性があらわれていると考えられており、この格差にのちの階層性の萌芽を見だしている。さらに、埋葬人骨間の関係を調べるために、層位や埋葬された地点の異なる 50 体分のミトコンドリア DNA が分析された。その結果、同じ住居に埋葬された人びとだけでなく、層位や住居を超えた人びとの間でも確かな類似が確認され、血縁集団の紐帯が長きにわたって維持されていたことが示された (Fernandez et al. 2008)。そしてこの遺跡では人骨中のフッ素含有量を測定してそれぞれの人骨の年代を割り出すことにも挑戦している。この分析を行った米ノートルダム大学のチームは、歯に含まれるフッ素の多寡によって成人と子供を峻別できることを示しただけでなく、フッ素年代測定法によってそれぞれ人骨の相対年代を割り出すことも可能であると主張した (Guerrero et al. 2011)¹⁾。この手法を埋葬人骨が多く見ついている他の遺跡でも行うことができれば、遺跡の存続期間や埋葬空間の利用形態に光をあてるものと期待できる。

90 年代以前には特殊な埋葬行為の現象面ばかりに注意が向かっており、その意味や背景についての考察は充分とは言い難かった。しかしながら近年の研究では、それぞれの遺跡において化学分析を行ったり、遺跡内コンテキストにおける埋葬の位置付けを行ったりしており、より多様な解釈がうまれるようになってきている。しかし埋葬に関する議論の多くは作業仮説を民族誌からの援用に依拠しており、さらなる方法論の模索は難航しているというのが現状である。テル・ハルラ遺跡をめぐる論考でみたような様々な実験的な試みが、それぞれの遺跡でも必要である。

2. 特殊建造物の意味

先土器新石器時代の遺跡からは特殊な大型建造物の検出が近年相次いでおり、その意味をめぐって活発な議論が行われている。その中でも大きな注目的になっているのは南東アナトリアのウルファ近郊の石灰岩丘陵上に位置するギョベクリ・テペ (Göbekli Tepe) 遺跡である。この遺跡の詳細についてはすでに邦語でも紹介されているためここでは繰り返さない (常木 2009; 三宅 2008)。水資源へのアクセスが悪く、農耕を営んでいなかったにもかかわらず、大勢の人員を動員して儀礼を行っていたことは従来の新石器時代像を大きく揺さぶる発見であったと言える (Peters and Schmidt 2004)。またこの頃にはカラハン・テペ (Karahan Tepe) 遺跡、およびハムザン・テペ (Hamzan Tepe) 遺跡とネヴァル・チョリ (Nevalı Çori) 遺跡でも T 字形石柱が検出されており、前者ではギョベクリ・テペ遺跡のものと同様の動物文様が側面に

刻まれていた (Çelik 2000, 2010; Hauptmann 1999)。これらもまた人びとが一堂に会した際に利用された儀礼的な建造物であると考えられている (Schmidt 2005; 本郷 2002)。

このような特殊な大型建造物はごく最近まで南東アナトリアの特徴であると考えられてきたが、南レヴァントでも PPNA 期のワディ・フェイナン 16 (WF16) 遺跡で巨大な円形建造物が発見され、ギョベクリ・テペ遺跡などとの対比が注目されている (Finlayson et al. 2011; Mithen et al. 2011)。O75 と名付けられたこの円形遺構は 22×19m の規模で、泥プラスターで床面が覆われているほか、遺構の約半分には高さ 50cm のベンチが備え付けられていた。調査者はこれを公共的な機能をもつ建造物であると考えており、大規模な儀礼の痕跡が南東アナトリアに特有のものではないことを強調している。

ほかにもジャルフ・アル・アフマル遺跡やハラン・チェミ (Hallan Çemi) 遺跡でも公共的な儀礼を行ったと考えられる遺構が検出されている (Rosenberg 1999; Stordeur et al. 2001)。後者ではベンチが伴う径 5-6m の 2 基の円形建造物から遠距離交易を示す黒曜石や銅鉱石が見つかったほか、そのうち 1 基からはオーロックスの頭骨が出土した。これらの所見をもとに、調査者はこれらの建造物が少なくとも公共的に利用されていたと考えており、その利用形態は儀礼的な性格を帯びたものであった可能性を示唆した (Rosenberg 1999: 27)²⁾。両遺跡ではギョベクリ・テペ遺跡のような石柱は確認されていないものの、自然界と人間との象徴的な関係性はこの時期の儀礼的建造物で繰り返し描写され、当時の社会にとってこの関係が特別な意味をもっていたことが窺える (Helmer et al. 2004)。

3. 饗宴の存在

先史時代における饗宴は近年盛んに論じられるようになってきたテーマの一つである。集団が一堂に会して食事を共にすることの政治的・経済的重要性が強調されており、とくに先土器新石器時代における社会構造の変化と関連して論じられることが多い。

農耕の開始の背景に饗宴があったとする考えはハイデン (B. Hayden) によって提示された。彼は数々の饗宴にまつわる研究の中で、饗宴がいかに人間社会にとって重要なものであるかを主張し、農耕を開始して余剰生産を生み出すようになった背景には饗宴の存在があるのだと解釈している (Hayden 1995, 2009)。饗宴の痕跡が西アジアではじめて認められるのは、ナトゥーフ後期のヒラズン・タハティート (Hilazon Tachtit) 洞窟である。ここではオーロックスを含む多くの動物遺存体が初老女性の埋葬人骨³⁾とともに発見された (Grosman et al. 2008; Munro and Grosman 2010)。調査者はハイデンの考えを引きながら、社会的過渡期における地域社会の紐帯を強化する試みとしてこの遺跡の饗宴を捉えており、そのような強固な関係を維持したコミュニティが後の農耕社会の確立に繋がっていったと解釈している。

先土器新石器時代の遺跡において、饗宴の痕跡が確認されているものは南東アナトリアのハラン・チェミ遺跡と南レヴァントのクファル・ハホレシュ遺跡が知られる。前者では径 15m ほどの中央広場から数多くの動物骨と被熱痕をとどめる礫が出土したほか、3 頭のヒツジの頭

骨が整然と並んで置かれていたことが報告されている (Rosenberg 1999)。後者では約 70 体もの埋葬遺体が見つかった一方で、人びとが暮らすような住居は検出されていない (Eshed et al. 2008; Horwitz and Goring-Morris 2004)。また中から少なくとも 8 頭のオーロックスの骨が出土したピットが検出され、そのピットの上面からは、十数点の礫とともに石灰プラスターに覆われた青年男性の人骨が見つかった。このオーロックスの遺骸は遺跡が利用されはじめたときに行われた饗宴の痕跡であり、総肉量が約 500kg だと推定して、一人に 200g 与えたとしても 2500 人分もの腹を満たす事ができるほどの大規模な饗宴であったと報告者は述べている (Goring-Morris and Horwitz 2007: 911)。

トゥイス (K. Twiss) は南レヴァントの先土器新石器時代における饗宴の様相とその展開を明らかにするために民族誌を活用している (Twiss 2008)。彼女は饗宴を単一の基準で捉えることは不可能であると考え、民族誌の中から饗宴の描写に繰り返し現れる事象を抽出し、どのような状況が考古資料から観察できれば饗宴を想定できるかを整理した。大量の飲食物の消費、富や権力の誇示など 12 項目からなる判定基準を設定し、実際の遺跡に当てはめたところ、PPNA 期では小規模であった饗宴が PPNB 期に複雑化・大規模化することが認められた。続く PPNC 期では集落の分散化に伴って饗宴の規模も縮小したという結果が得られた。この背景として、饗宴には食物を集団でともに食することによる社会的紐帯の強化や経済的発展の促進という効果があり、農耕成立時の社会的な生活基盤を構築する機能があったと彼女は考えている。

このような考察において饗宴は機能主義的な枠組みで論じられてしまっている。実際饗宴が行われていたとしても、その実態は多様性に富んでいたはずであり、それらを単純な構図で説明しようとする姿勢には疑問がある。とくにトゥイスの研究ではそれぞれの遺跡のコンテクストに注意を払わずに、饗宴を示す可能性のあるものを都合よく集めてきている印象が拭えない。

IV. 住居・集落構造の研究

新石器時代における住居形態や集落構造、セトルメントパターンの変化もまた、様々な研究の対象となってきた。これには大きく二つの方向性がある。

ひとつは、住居や集落構造の変遷を捉え、その画期の背景を考察するというものである。時期が下るにつれて住居が円形から方形へ、単室から複室へと変化すること、集落内の居住密度が上昇することを指摘するほか、それぞれの画期の背景に環境への適応や生業基盤の転換や社会構造の変化を想定するものがここには多くみられる (例えば、Goring-Morris and Belfer-Cohen 2008; 小高 2005)。また南レヴァントや南東アナトリアなどで PPNB 後期に集落構造が大きく変わり、それまでの大規模集落に集住する形から小規模集落に分散して生活する形に変化したことが近年多くの研究者によって指摘されている (Kuijt and Goring-Morris 2002; Verhoeven 2002, 2004; 門脇 2009)。例えば南レヴァントでは新石器化の舞台であったヨルダン渓谷が放棄され、多くの農耕集落が高地に分布するようになることが知られている。この農耕

社会の「崩壊」の原因としては、気候や環境の悪化 (Simmons 2007)、マラリアの蔓延 (安倍 2009)、人口の増加 (Kuijt 2000a) などが挙げられている。

もう一方では、住居形態や集落構造に象徴的な意味を見いだそうとする研究がある。例えば、ブチャクチュ (E. Bıçakçı) は新たな技術の発明や資材の利用そして異なる資材や技術を組み合わせる住居はひとつの製品として捉えるべきであり、その中に入って生活することは物質的ではなく象徴的に重要な意味があると述べている (Bıçakçı 2003)。そしてドゥリング (B. S. Düring) は、アシュクル・ホユック遺跡とチャタル・ホユック遺跡における時期をまたいだ住居の重なりについて、その背景に機能的なものよりも祖先との繋がりを重視する観念の存在を指摘している (Düring 2007)。この研究では、広い枠組みで通用するモデルを構築することは主眼ではなく、個々の住居自体がもつ歴史をいかに叙述するかを重視していることも重要である。また、バニング (E. Banning) は南レヴァントの新石器時代住居を集成したうえで、それらの機能が従来考えられてきたものよりも儀礼的なものであったことを示唆している (Banning 2003)。多くの遺跡で住居のプランに共通性が認められることは、当時の世界観の共有を示唆するものであり、ドメスティケーションが進展していくなかで住居という存在は象徴的にも社会的にも重要なものであったという。さらにワトキンス (T. Watkins) も同様の文脈で住居のあり方について触れている (Watkins 2004)。彼によれば、すでに高い認知能力を有していたナトゥーフ期やPPNA期の人びとによる住居の建築は、彼らが生きる「世界」の構築と同義であるという。したがって、建築遺構のあり方を単純に機能的に捉えるのではなく、物質文化に埋め込まれた彼らの象徴的世界に目を向けることが重要であると主張している。これらの主張には近年の研究の趨勢が端的に示されているものの、結局は「高い認知能力の萌芽」「象徴的関係性の構築」「社会的紐帯の強化」といった月並みな結論に至るものが多く、さらなる方法論の深化が求められているように思える。

V. 多様な研究事例

1. 技術の発展

新石器時代における技術の発展は古くから注目されてきた分野であるが、近年では石器製作技術の単純な比較といったものはあまり見られない一方で、パイロテクノロジーの展開という観点からプラスター利用のあり方を問うものや、ビーズの専門的生産体制の存在に迫るものなど、後の時代に大きな影響を与える技術体系の萌芽を捉えようとする研究が目立つ。

プラスターの利用は後の白色容器につながるだけでなく、多くの遺跡で多様な用いられ方をしていることからその技術的系譜や起源が注目されてきた (例えば、久米 2010; 三宅 1994)。そのなかでゴレン (Y. Goren) らはクファル・ハホレシュ遺跡の事例を参考にして、実験的にプラスター焼成窯を造り、そこで実際にプラスターを焼成することで、作業量や燃料の多寡を算定した (Goren et al. 2008)。その結果、約 250kg の生石灰を生成するためには、燃料 (木枝と糞) が約 1 トンあれば充分であることが示された。これまでの研究ではプラスター焼成が周

辺環境に与えた影響は甚大なものと考えられてきたが、製作実験を行った彼らは、当時の周辺の植生を考えればその影響は微々たるものであったと評価している (Goren and Goring-Morris 2008: 795)。また9年間放置した実験用の窯が崩壊してほとんど原型をとどめていなかったことに触れ、新石器時代にプラスター焼成窯が見つからないことはなんら不自然ではないと述べている。この実験は当時の技術水準にどこまで近づけているのかという疑問が残るものの、斬新な視点で行われた研究であり興味深い。

またライト (K. Wright) は近年、東ヨルダンのワディ・ジラット (Wadi Jilat) 遺跡から出土する石製ビーズの分析を精力的に行っている (Wright and Goring-Morris 2003; Wright et al. 2008)。この遺跡の近隣にはビーズ素材に多く利用された緑色の石材が分布する「ダッバ・マーブル」と呼ばれる一大産地があり、とくに PPNB 期から集中的に利用されていたことが分かっている。遺跡から出土したビーズを蛍光 X 線分析と X 線回折にかけた結果、それらはダッバ・マーブル産のものであることが判明した。この遺跡ではビーズ製作の痕跡を示す 7000 点以上もの微少剥片が出土している一方で、完形品の出土は限定的である。このことから彼女はワディ・ジラット遺跡が特定素材の産地近くに工房を構え、製品を周辺の遺跡へ搬出している、いわば工芸專業の初現ともいえる様相を示していると考えている。この産地を開発したのは家畜飼養を生業とする集団であり、基盤となる集落との間に交易関係を結んでいたことが想定されているが (Wright et al. 2008: 157)、そのような結論に至るためには近隣集落との関係や彼らの生業形態などを明らかにする必要がある。彼女はさらなる産地同定に取り組む姿勢を見せており、各遺跡から出土する多くのビーズを化学分析にかける必要があることを主張している。課題は残されるものの、そのような分析ができれば製品の産地や交易ルートなどに具体的に迫れるようになるだろう。

2. 骨学的・古病理学的研究

食糧獲得経済から食糧生産経済への変化は人びとの健康面にも大きな影響を与えることになった。先史時代の遺跡で頻繁にみられる骨病変としてはクリブラ・オルビタリア (眼窩筋)⁴⁾と骨萎縮性骨増殖症が知られており、ともに栄養不良によって発症すると考えられている⁵⁾。また関節部分に極端な摩耗が観察できれば、当時の人びとがどのような身体動作を繰り返していたのかが分かり、そこから社会内における労働環境の復元も可能となる。

エシェド (V. Eshed) は南レヴァントにおけるナトゥーフ期の人骨 200 体と新石器時代の人骨 205 体をそれぞれ分析し、そこに認められる病変の痕跡を調べた (Eshed et al. 2010)。頭部の外傷、関節炎、炎症性疾患の3種の出現頻度を観察した結果、新石器時代ではクリブラ・オルビタリアをはじめとする炎症性疾患が増加するなど、それ以前とは健康状態が大きく異なることが示された。テル・アブ・フレイラ (Tell Abu Hureyra) 遺跡では、足の親指の付け根の摩耗が女性に顕著であるとの結果から、女性が主として製粉作業に従事していたと考えられている (Moore et al. 2000)。このように骨病変から当時の健康状態を復元することは可能である

が、遺跡ごとの実態は多様であり、いずれの研究結果もそのまま他の遺跡で適用できるとは限らない。農耕の開始は疫病の増加や特定資源への傾倒や社会関係の複雑化など、様々な側面では人びとの健康面のリスクを向上させたと考えられる (Mummert et al. 2011)。しかし必ずしも全ての農耕民の健康状態が悪化するわけではなく、むしろ狩猟採集民の健康状態の方が悪い例もあるなど実態はかなり複雑であったことが近年分かってきた (Eshed et al. 2010: 123)。

また農耕の開始に伴い人びとが集住するようになった結果として、集落内の衛生環境が悪化した可能性を指摘する研究も知られている。安倍は PPNB 期におけるヨルダン渓谷から高地への遺跡分布の変化をマラリアの蔓延地域からの離脱という文脈で捉えられると考えている (安倍 2010)。ヨルダンの地勢やハマダラ蚊の生態など状況証拠はそろっているものの、マラリア蔓延の証左とされる資料がアトリット・ヤム遺跡の3体にみられた地中海貧血しか示されていない。この解釈の説得力をいかに高めるかが課題となるが、病理学のデータと考古学の資料を結びつけて論じる試みは興味深い。

骨病変は個人の健康状態をあらわす指標となるが、分析サンプルが限定されるという弱みがある。人骨の炭素・窒素同位体分析では当時の人びとの食性を示す有効なデータが得られるはずだが、西アジアの新石器時代の人骨を対象とした事例はほとんど管見に触れない。欧州では積極的に利用され様々な成果をあげているこの手法が西アジアでも普及すれば、人びとの健康面や食性にさらに迫ることができるようになると考えられる (例えば, Tresset and Vigne 2011)。

3. 理論的検討

近年の新石器時代研究のひとつのあり方を方向づけたのはコヴァン (J. Cauvin) である。“*The Birth of the Gods and the Origins of Agriculture*” と題された彼の著作は、母国フランスで 1994 年に刊行されたものの、英訳が 2000 年によりやく完成し、その内容に多くの研究者が衝撃を受けた (Cauvin 2000)。それは新石器時代における真の革命的な出来事とは、生業経済の変化などではなく、それ以前に人びとの心に訪れていた変化であると主張したものであった。各地の遺物や遺構を収集した彼は、農耕開始の基盤には当時の人びとの認知的側面の発達が必要であったと考えた。ここに宗教の萌芽を認める彼の論考は、恣意的な資料操作の印象がぬぐえないものの、これまでの研究のあり方に軌道修正を迫るものとして大きなインパクトを持つものであった。彼の著作の英訳者でもあるワトキンスもコヴァンと同様の問題意識を抱いており、近年の研究をまとめる際にも、新石器時代の本質的な変化は経済的なものではなく、むしろ認知的・文化的なものであると評価している (Watkins 2010)。ギョベクリ・テペ遺跡に代表されるような非常に発達した儀礼体系の痕跡がみつかるようになった昨今、コヴァンの先見の明は評価する必要がある。

また近年ではフェルフェン (M. Verhoeven) のように、物質文化の分析を通して、それを生み出した人びとの世界観とその変化を考察しようとする試みもみられる。フェルフェン

ンは新石器時代の本質を捉えるためには当時の社会の多様な変化を統合して理解する、全体論的アプローチが必要になると主張した (Verhoeven 2004)。彼はドメスティケーションとは動植物と人間の経済的関係性といった領域にとどまるものではなく、人間世界のあらゆる領域を含んだ多面的かつ総合的なものであり、それは広い時間幅をもって通時的に観察される必要があると説明している。

一方でフィンレイソン (B. Finlayson) は新石器時代研究における一般的モデルの構築という目的自体に疑問を抱いており、ローカルヒストリーに光を当てることの必要性を説いている。巨視的な視点や現代の観念では捉えられないものがあることを埋葬と住居の関係を例に示しており、それぞれ個別のコンテキストを重要視するエージェンシーの概念を用いて新石器時代の遺跡のあり方を理解する必要があると主張している (Finlayson 2010)。

VI. おわりに これからの研究の展望

西アジア先土器新石器時代の研究動向をそれぞれのテーマや手法にそって紹介してきた。ここでは紙幅の都合上触れることができなかつた研究もある。また新しい論考を提示することに主眼をおいたため、その研究の評価や位置付けといったことを充分に行うことができなかつた部分もあるように思う。ここで本稿を通じて分かつたことを簡単にまとめておきたい。

西アジア考古学の最大のテーマのひとつである農耕牧畜の起源を明らかにしようとする研究が、近年では化学的分析手法の改良や新資料の発見も相まって活発に行われている。その結果、研究者をとりまく状況が急速に変化し、十数年前までの常識がもはや通用しないようになってきている。これまでは栽培化・家畜化の起源の前段階である野生の動植物への積極的な働きかけは植物の方が1500年ほど先行するとみられてきたが (Zeder 2011)、最近では ca. 11,500 cal B.P. までにほとんど併行してこのような働きかけがあつたと考えられるようになってきた (Zeder 2011: S230)。そしてそれらの起源は決して一様なものではなく、種や地域によってモザイク状に発展してきたことが様々な研究で明らかになった。「定住的農耕牧畜」と「遊動的狩猟採集」という単純な二項対立の構図では捉えきれない複雑な実態が眼前に現れているのだと言える。

西アジアでは調査件数が限られており、調査対象になっている遺跡もその全体像は判然としないものがほとんどである。そのような状況であるにもかかわらず、これまでの研究には離れた点と点を短絡的に結びつけるようなものが多くあり、先史時代の社会を分かりやすい図式で説明しようという試みがなされてきた。ところが昨今の研究成果を鑑みればそのような「大きな物語」は必ずしも成立せず、遺跡ごとに多様な実態があることが明らかである。研究者らもそのことをよく自覚しており、既存の枠組みに対する挑戦や方法論の模索という文脈で、実証的に資料を積み重ねて議論を精緻化するものや、それぞれの遺跡におけるコンテキストを重要視するものが多く発表されてきた。「大きな物語の終焉」が語られるようになってすでに久しい (リオタール 1986)。均質化・一般化された西アジア新石器時代像というものはもはや観念

の上には存在しないように思われる。今後もそれぞれの遺跡のコンテクストに基づく解釈や研究は進められていくだろう。しかし行き過ぎた相対主義は不毛な議論へと展開しかねない。行き着く果てにあるのは、細々とした資料と解釈の吹き溜まりのような荒涼としたものではなく、それぞれの研究成果を遺跡内や遺跡間で有機的に結びつけることができるような視座であることを期待している。

註

- 1) しかしながら、フッ素の骨中含量は堆積環境によって大きく変動するものであるため、そのデータの取り扱いや相互比較には注意を要する。調査者も分析技術の改良やサンプリングの問題など、乗り越えるべき課題はまだあると付け加えている (Guerrero et al. 2011: 1500)。
- 2) これらの遺構の他には各層で径 2m ほどの (半) 円形遺構が見つかっている。これらと比較して 5-6m の円形遺構に特殊性を見だしているものの、規模の面からは小型のものは居住用でないと考えるのが妥当であるかもしれない。
- 3) 埋葬遺体が 1 体しか検出できていないこと、この女性がイヌ科動物の裂肉菌に穿孔を施したペンダントを身に着けていたこと、オーロックとカメのほかにイヌワシの翼やウシの尾など様々な動物の特定部位だけが墓坑内に入れられていたことを評価し、調査者はこの被葬者がシャーマンであったと解釈している (Grosman et al. 2008)。
- 4) 栄養不良によって、眼窩の上壁部分に無数の小さな孔があく症状。
- 5) 直接の原因は様々あるものの、クリブラ・オルビタリアはビタミン C や鉄分の欠乏 (貧血) が、骨萎縮性骨増殖症はビタミン B1 の不足が原因であると指摘されている (Eshed et al. 2010: 124)。

参考文献

- Banning, E. B. 2003 Housing Neolithic farmers. *Near Eastern Archaeology*. 66(1/2), pp. 4-21.
- Bar-Yosef, O. and R. H. Meadow 1995 The origins of agriculture in the Near East. In T.D. Price and A.B. Gebauer (eds.), *Last Hunters, First Farmers: New Perspectives on the Prehistoric Transition to Agriculture*. Santa Fe, School of American Research Press, pp. 39-94.
- Barker, G. 2009 *The Agricultural Revolution in Prehistory: Why Did Foragers Become Farmers?* New York, Oxford University Press.
- Bıçakçı, E. 2003 Observations on the Early Pre-Pottery Neolithic architecture in the Near East: 1. New building materials and construction techniques. In M. Özdoğan, H. Hauptmann and N. Başgelen (eds.), *From Villages to Town: Early Villages in the Near East*. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları, pp. 385-413.
- Bienert, H. D. 1991 Skull cult in the prehistoric Near East. *Journal of Prehistoric Religion*. 5, pp. 9-23.
- Bonogofsky, M. 2003 Neolithic plastered skulls and railroading epistemologies. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research*. 331, pp. 1-10.
- Bonogofsky, M. 2004 Including women and children: Neolithic modeled skulls from Jordan, Israel, Syria and Turkey. *Near Eastern Archaeology*. 67(2), pp. 118-119.
- Cauvin, J. 2000 *The Birth of the Gods and the Origins of Agriculture*. Translated by T. Watkins. Cambridge, Cambridge University Press.
- Çelik, B. 2000 A new Early Neolithic settlement: Karahan Tepe. *Neo-Lithics*. 2-3(00), pp. 6-8.
- Çelik, B. 2010 Hamzan Tepe in the light of new finds. *Documenta Praehistorica*. 37, pp. 257-268.

- Düring, B. S. 2007 Building continuity in the central Anatolian Neolithic: Exploring the meaning of buildings at Asıklı Höyük and Çatalhöyük. *Journal of Mediterranean Archaeology*. 18(1), pp. 3-29.
- Evershed, R. P. et al. 2008 Earliest date for milk use in the Near East and southeastern Europe linked to cattle herding. *Nature*. 455(7212), pp. 528-531.
- Eshed, V., Gopher, A., Pinhasi, R. and I. Hershkovitz 2010 Paleopathology and the origin of agriculture in the Levant. *American Journal of Physical Anthropology*. 143(1), pp. 121-133.
- Eshed, V., Hershkovitz, I. and A. N. Goring-Morris 2008 A re-evaluation of burial customs in the Pre-Pottery Neolithic B in light of paleodemographic analysis of the human remains from Khar HaHoresh, Israel. *Paléorient*. 34(1), pp. 91-103.
- Fernandez, E., Ortiz, J., Torres, T., Perezperez, A., Gamba, C., Tirado, M., Baeza, C., Lòpez-Parra, A. M., Turbòn, D. Anfruns, J., Molist, M. and E. Arroyo-Pardo 2008 Mitochondrial DNA genetic relationships at the ancient Neolithic site of Tell Halula. *Forensic Science International: Genetics Supplement Series*. 1(1), pp. 271-273.
- Finlayson, B. 2010 Agency in the Pre-Pottery Neolithic A. In D. Bolger and L. C. Maguire (eds.), *The Development of Pre-State Communities in the Ancient Near East*. Oxford, Oxbow Books Ltd., pp. 141-146.
- Finlayson, B., Mithen, S. J., Najjar, M., Smith, S., Maricevic, D., Pankhurst, N. and L. Yeomans 2011 Architecture, sedentism, and social complexity at Pre-Pottery Neolithic A WF16, southern Jordan. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*. 108(20), pp. 8183-8188.
- Goodale, N., Otis, H., Andrefsky Jr, W., Kuijt, I., Finlayson, B. and K. Bart 2010 Sickle blade life-history and the transition to agriculture: an early Neolithic case study from Southwest Asia. *Journal of Archaeological Science*. 37(6), pp. 1192-1201.
- Goren, Y., Goring-Morris, A. N. and I. Segal 2001 The technology of skull modelling in the Pre-Pottery Neolithic B (PPNB): Regional variability, the relation of technology and iconography and their archaeological implications. *Journal of Archaeological Science*. 28(7), pp. 671-690.
- Goren, Y. and A. N. Goring-Morris 2008 Early pyrotechnology in the Near East: Experimental lime-plaster production at the Pre-Pottery Neolithic B site of Kfar HaHoresh, Israel. *Geoarchaeology*. 23(6), pp. 779-798.
- Goring-Morris, A. N. 2000 The quick and the dead: The social context of Aceramic Neolithic mortuary practices as seen from Kfar HaHoresh. In I. Kuijt (ed.), *Life in Neolithic Farming Communities*. New York, Kluwer Academic / Plenum Publishers, pp. 103-136.
- Goring-Morris, A. N. and A. Belfer-Cohen 2008 A roof over one's head: Developments in Near Eastern residential architecture across the Epipalaeolithic-Neolithic transition. In J. P. Bocquet-Appel and O. Bar-Yosef (eds.), *The Neolithic Demographic Transition and its Consequences*. London, Springer, pp. 239-286.
- Goring-Morris, A. N. and L. K. Horwitz 2007 Funerals and feasts during the Pre-Pottery Neolithic B of the Near East. *Antiquity*. 81, pp. 902-919.
- Grosman, L., Munro, N. D. and A. Belfer-Cohen 2008 A 12,000-year-old shaman burial from the southern Levant (Israel). *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*. 105(46), pp. 17665-17669.
- Guerrero, E., Molist, M., Kuijt, I. and J. Anfruns 2009 Seated memory: New insights into Near Eastern Neolithic mortuary variability from Tell Halula, Syria. *Current Anthropology*. 50(3), pp. 379-391.
- Guerrero, E., Schurr, M., Kuijt, I., Anfruns, J. and M. Molist 2011 Timing the Neolithic transition: the application of fluoride dating at Tell Halula, Syria. *Journal of Archaeological Science*. 38(7), pp. 1496-1501.

- Haldorsen, S., Akan, H., Çelik, B. and M. Heun 2011 The climate of the Younger Dryas as a boundary for Einkorn domestication. *Vegetation History and Archaeobotany*. 20, pp. 305-318.
- Hauptmann, H. 1999 The Urfa region. In M. Özdoğan and N. Başgelen (eds.), *Neolithic in Turkey*. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayinlari, pp. 65-86.
- Hayden, B. 1995 A new overview of domestication. In T. D. Price and A. B. Gebauer (eds.), *Last Hunters, First Farmers: New perspectives on the prehistoric transition to agriculture*. Santa Fe, School of American Research Press, pp. 273-299.
- Hayden, B. 2009 The proof is in the pudding: Feasting and the origins of domestication. *Current Anthropology*. 50(5), pp. 597-601.
- Helmer, D., Gourichon, L. and D. Stordeur 2004 À l'aube de la domestication animale. Imaginaire et symbolisme animal dans les premières sociétés néolithiques du nord du Proche-Orient. *Anthropozoologica*. 39(1), pp. 143-163.
- Heun, M., Haldorsen, S. and K. Vollan 2008 Reassessing domestication events in the Near East: Einkorn and Triticum urartu. *Genome*. 51(6), pp. 444-451.
- Horwitz, L. K. and A. N. Goring-Morris 2004 Animals and Ritual during the Levantine PPNB: a Case Study from the Site of Kfar Hahoreh, Israel. *Anthropozoologica*. 39(1), pp. 165-178.
- Kislev, M. E., Hartmann, A. and O. Bar-Yosef 2006 Early domesticated fig in the Jordan Valley. *Science*. 312(5778), pp. 1372-1374.
- Köhler-Rollefson, I. 1992 A model for the development of nomadic pastoralism on the Transjordanian plateau. In O. Bar-Yosef and A. M. Khazanov (eds.), *Pastoralism in the Southern Levant: Archaeological Materials in Anthropological Perspectives*. Madison, Prehistory Press, pp. 11-18.
- Koutsadelis, C. 2007 *Mortuary Practices in the Process of Levantine Neolithisation*. BAR International Series 1685, Oxford.
- Kuijt, I. 1996 Negotiating equality through ritual: A consideration of Late Natufian and Prepottery Neolithic A Period mortuary practices. *Journal of Anthropological Archaeology*. 15(4), pp. 313-336.
- Kuijt, I. 2000a People and space in early agricultural villages: Exploring daily lives, community size, and architecture in the Late Pre-Pottery Neolithic. *Journal of Anthropological Archaeology*. 19(1), pp. 75-102.
- Kuijt, I. 2000b Keeping the peace: ritual, skull caching, and community integration in the Levantine Neolithic. In I. Kuijt (ed.), *Life in Neolithic Farming Communities: Social Organization, Identity, and Differentiation*. New York, Kluwer Academic / Plenum Publishers, pp. 137-163.
- Kuijt, I. and A. N. Goring-Morris 2002 Foraging, farming, and social complexity in the Pre-Pottery Neolithic of the Southern Levant: A review and synthesis. *Journal of World Prehistory*. 16(4), pp. 361-440.
- Kuijt, I., Guerrero E., Molist M. and J. Anfruns 2011 The Changing Neolithic Household: Household Autonomy and Social Segmentation, Tell Halula, Syria. *Journal of Anthropological Archaeology*. 30, pp. 502-522.
- McCartney, C. 2010 Outside the corridor? the Neolithisation of Cyprus, In D. Bolger and L. C. Maguire (eds.), *The Development of Pre-State Communities in the Ancient Near East*. Oxford, Oxbow Books Ltd., pp. 185-196.
- Meadows, J. 2005 The Younger Dryas episode and the radiocarbon chronologies of the Lake Huleh and Ghab Valley pollen diagrams, Israel and Syria. *The Holocene*. 15(4), pp. 631-636.
- Moore, A. M. T., Hillman, G. C. and A. J. Legge (eds.) 2000 *Village on the Euphrates: From Foraging to Farming at Abu Hureyra*. Oxford, Oxford University Press.
- Mithen, S., Finlayson, B. and S. Smith 2011 An 11,600 year-old communal structure from the Neolithic of

- southern Jordan. *Antiquity*. 85, pp. 350-364.
- Mummert, A., Esche, E., Robinson, J., and G. J. Armelagos 2011 Stature and robusticity during the agricultural transition: Evidence from the bioarchaeological record. *Economics and Human Biology*. 9, pp. 284-301.
- Munro, N. D. and L. Grosman 2010 Early evidence (ca. 12,000 B.P.) for feasting at a burial cave in Israel. *Proceedings of the National Academy of Sciences*. 107(35), pp. 15362-15366.
- Pearson, J. A., Buitenhuis, H., Hedges, R. E. M., Martin, L., Russell, N. and K. Twiss 2007 New light on early caprine herding strategies from isotope analysis: a case study from Neolithic Anatolia. *Journal of Archaeological Science*. 34(12), pp. 2170-2179.
- Peters, J. and K. Schmidt 2004 Animals in the symbolic world of Pre-Pottery Neolithic Göbekli Tepe, south-eastern Turkey: a preliminary assessment. *Anthropozoologica*. 39(1), pp. 179-218.
- Rosenberg, M. 1999 Hallan Çemi. In M. Özdoğan (ed.), *Neolithic in Turkey: The Cradle of Civilization, New Discoveries*. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınlar, pp. 25-33.
- Savard, M., Nesbitt, M. and M. Jones 2006 The role of wild grasses in subsistence and sedentism: new evidence from the northern Fertile Crescent. *World Archaeology*. 38(2), pp. 179-196.
- Schmidt, K. 2005 "Ritual Centers" and the Neolithisation of Upper Mesopotamia. *Neo-Lithics*. 2(05), pp. 13-21.
- Simmons, A. H. 2007 *The Neolithic Revolution in the Near East: Transforming the Human Landscape*. Arizona, University of Arizona Press.
- Stordeur, D. 2003 Des crânes surmodelés à Tell Aswad de Damascène (PPNB-Syrie). *Paléorient*. 29(2), pp. 109-115.
- Stordeur, D., Brenet, M., Der-Aprahamian, G. and J. C. Roux 2001 Les bâtiments communautaires de Jerf el Ahmar et Mureybet Horizon PPNA (Syrie). *Paléorient*. 26(1), pp. 29-44.
- Tanno, K. and G. Willcox 2006 How fast was wild wheat domesticated? *Science*. 311(5769), p. 1886.
- Tresset, A., and J. D. Vigne 2011 Last hunter-gatherers and first farmers of Europe. *Comptes Rendus Biologies*. 334, pp. 182-189.
- Twiss, K. 2008 Transformations in an early agricultural society: Feasting in the southern Levantine Pre-Pottery Neolithic. *Journal of Anthropological Archaeology*. 27(4), pp. 418-442.
- Verhoeven, M. 2002 Ritual and ideology in the Pre-Pottery Neolithic B of the Levant and Southeast Anatolia. *Cambridge Archaeological Journal*. 12(2), pp. 233-258.
- Verhoeven, M. 2004 Beyond boundaries: Nature, culture and a holistic approach to domestication in the Levant. *Journal of World Prehistory*. 18(3), pp. 179-282.
- Vigne, J. D. and D. Helmer 2007 Was milk a "secondary product" in the Old World Neolithisation process? Its role in the domestication of cattle, sheep and goats. *Anthropozoologica*. 42(2), pp. 9-40.
- Vigne, J. D., Carrère, I., Briois, F. and J. Guilaine 2011 The early process of mammal domestication in the Near East. *Current Anthropology*. 52(S4), pp. S255-S271.
- Watkins, T. 2004 Building houses, framing concepts, constructing worlds. *Paléorient*. 30(1), pp. 5-23.
- Watkins, T. 2010 New light on Neolithic revolution in South-West Asia. *Antiquity*. 84, pp. 621-634.
- Weiss, E., Kislev, M. E. and A. Hartmann 2006 Autonomous cultivation before domestication. *Science*. 312, pp. 1608-1610.
- Willcox, G. 2005 The distribution, natural habitats and availability of wild cereals in relation to their domestication in the Near East: multiple events, multiple centres. *Vegetation History and Archaeobotany*. 14(4), pp. 534-541.
- Willcox, G., Fornite, S., and L. Herveux 2007 Early Holocene cultivation before domestication in northern Syria.

- Vegetation History and Archaeobotany*. 17(3), pp. 313-325.
- Willcox, G., Buxo, R. and L. Herveux 2009 Late Pleistocene and early Holocene climate and the beginnings of cultivation in northern Syria. *The Holocene*. 19(1), pp. 151-158.
- Wright, K. and A. Garrard 2003 Social identities and the expansion of stone bead-making in Neolithic Western Asia: new evidence from Jordan. *Antiquity*. 77(296), pp. 267-284.
- Wright, K., Critchley, P., Garrard, A., Baird, D., Bains, R. and S. Groom 2008 Stone bead technologies and early craft specialization: Insights from two Neolithic sites in Eastern Jordan. *Levant*. 40(2), pp. 131-165.
- Zeder, M. A. 2005 New perspectives on livestock domestication in the Fertile Crescent as viewed from the Zagros Mountains. In J. D. Vigne, J. Peters and D. Helmer (eds.), *The First Steps of Animal Domestication: New Archaeobiological Approaches*. Oxford, Oxbow Books Ltd., pp. 125-147.
- Zeder, M. A. 2008 Domestication and early agriculture in the Mediterranean Basin: Origins, diffusion, and impact. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*. 105(33), pp. 11597-11604.
- Zeder, M. A. 2011 The origins of agriculture in the Near East. *Current Anthropology*. 52(S4), pp. S221-S235.
- 安倍雅史 2009 「初期完新世湿潤期とマラリアー先土器新石器時代に起きたヨルダン渓谷からヨルダン高地への集落シフトに関する一仮説」『日本西アジア考古学会第15回総会・大会要旨集』日本西アジア考古学会 35-42頁.
- 大田 正 2009 「野生コムギの農業生態系への適応と栽培化」山本紀夫編『国立民族学博物館調査報告』第84号 153-176頁.
- 小高敬寛 2005 「西アジア新石器時代の巨大集落—テル・エル・ケルク遺跡の事例から—」『社会考古学の試み』同成社 115-130頁.
- 門脇誠二 2009 「西アジア新石器集落の崩壊と再編成—世帯からの展望—」『農耕と都市の発生—西アジア考古学最前線—』同成社 61-82頁.
- 久米正吾 2010 「西アジア新石器時代における白色容器の成形方式とその分布—特に籠目圧痕を有する事例を中心として—」菊池徹夫編『比較考古学の新地平』同成社 981-992頁.
- 常木 晃 2009 「西アジアにおける農耕文化のはじまり」設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦編『弥生時代の考古学5 食糧の獲得と生産』同成社 78-93頁.
- 常木 晃 2010 「頭蓋骨埋葬の二態」『歴史人類』第38号 87-113頁.
- 西秋良宏編 2008 『遺丘と女神—メソポタミア原始農耕の黎明』東京大学総合研究博物館.
- ベルウッド, P. 2008 『農耕起源の人類史』長田俊樹・佐藤洋一郎(監訳), 京都大学学術出版会《Bellwood, P. *First Farmers: The Origins of Agricultural Societies*, Malden, Wiley-Blackwell.》
- 藤井純夫 2009 「沙漠のドメスティケーション」『国立民族学博物館調査報告』第84号 519-553頁.
- 本郷一美 2002 「狩猟採集から食料生産への緩やかな移行」『国立民族学博物館調査報告』第33号 109-158頁.
- 本郷一美 2008 「ドメスティケーションの考古学」『総研大ジャーナル』第13号 30-35頁.
- 三宅 裕 1994 「西アジア新石器時代におけるブラスター使用について」岩崎卓也先生退官記念論文集編集委員会編『日本と世界の考古学—現代考古学の展開—』雄山閣 384-402頁.
- 三宅 裕 2003 「家畜化をどう捉えるべきか—動物考古学の研究動向から—」『西アジア考古学』第4号 3-12頁.
- 三宅 裕 2008 「トルコ考古学この10年」『西アジア考古学』第9号 3-9頁.
- リオタール, J.-F. 1986 『ポスト・モダンの条件: 知・社会・言語ゲーム』小林康夫(訳), 書肆風の藩籬《Lyotard, J.-F., *La condition postmoderne: rapport sur le savoir*. Paris, Éditions de Minuit.》

Recent Studies on the Pre-Pottery Neolithic in West Asia

MASUMORI, D. Kaisho

This paper summarizes research trends in the Pre-Pottery Neolithic of West Asia, a subject of lively debate in recent years. Since 2000, remarkable progress in various fields, an improvement in research technology and the discovery of new material, has challenged previous assumptions. In contrast to the traditional image of a straight and rapid trajectory toward agriculture and pastoralism in the Neolithic period, recent studies reveal a more complex picture of a gradual development in domestication, along with large scale buildings used for rituals, and a diversity of rituals and symbols. In light of this new data, the “grand theory” of the Neolithic is being revised to place more significance upon the context in which each excavation is found, and the complexity and variety in Neolithic society is being revealed. Having arrived at the end of the road for the “grand theory” of the Neolithic this paper asks what is the next step for research on the Pre-Pottery Neolithic.